

第11回 日能研

文学コンクール

奨励賞

【創作文】 Green Flash

栄光学園高等学校・三年

原 惇一郎さん

作品に対する思い・感想

この度は、奨励賞に選んでいただきありがとうございます。

文章を書くことは、誰にでもできることでありながら、自分自身を自由に表現するいちばんの手段だと思っています。

頭に浮かんだささいなことや、つい考えてしまう非現実的な想像を見えるものに変えられる。そんな「自由」を、この創作文を書くことを通じて楽しむことができました。

彼女に初めて会ったのは、観覧車の前だった。

近所に新しく遊園地ができたと聞いて、僕は休日にも一人でそこへ出かけた。誰か友だちと一緒に連れて行けばよかったのだが、あいにく僕には遊園地へ一緒に行くほどの親しい友達はいなかった。僕は人と話すのが苦手だったのだ。行ってみると、そこは思っていたよりも遊園地らしいつくりである。きらきらとしたイルミネーション。あちこちに点在するメリーゴーラウンド、コーヒークップ、ジェットコースターなどのアトラクション。風船を配る着ぐるみのマスコット。風船が飛んで行って泣いている子ども。そこにははっきりと遊園地の時間が流れているのだった。

僕は遊園地に入ると、観覧車へと向かった。華やかで騒々しい遊園地の中で、唯一ゆっくりとした時間が流れているように感じられる観覧車が僕は好きだった。乗ろうかどうかと考えていると、後ろから声をかけられた。

「一緒に乗ろうよ」

僕が驚いて後ろを振り返ると、そこには僕と同じくらいの年齢の女の子がにこにこして立っている。僕の顔を見ても笑顔が崩さないあたり、人違いではなさそうだ。僕が戸惑っていると、彼女は僕の手を引いて係のお兄さんに話しかけた。

「観覧車のチケット二枚ください」

そう言ってチケットをもらうと、その一枚を僕に渡すのだった。

その観覧車はそれほど大きくはなかったが、いちばん高いところまで行くと都会の街並みを見渡すことができた。そして、その反対側には大きな海が広がっていた。海は太陽の光をまぶしく反射し、僕たちの顔を明るく照らした。彼女はその光景を、大きな目を輝かせながら眺めていたが、また突然僕に話しかけてきた。

「あなた、一人で遊園地に来たの？そんな人珍しいよ」

君も一人じゃないか、と僕が彼女に尋ねると、彼女は笑って答えない。年齢や住んでいるところを聞いても彼女はやっぱり笑って綺麗なショートカットの黒髪を揺らし、僕の質問には答えてくれないのだった。

その間にも観覧車はまわっていく。一周して僕たちは観覧車から降りた。どうして僕はこの知らない女の子と二人で観覧車に乗ったのだろうか、どうして二人きりなのに話せたのだろうか、などと考えながら彼女の方を見てみると、不思議なことに彼女はいなくなっていた。周りを見てもそれらしい人影は見当たらない。僕はもやもやとした気分です遊園地を出た。

僕は次の休日にも遊園地へとやってきた。彼女にまた会えるかもしれないという淡い期待を抱きながら、きよろきよろとしているとコーヒークップの前に見覚えのある後ろ姿を見つけた。近づいていくと彼女は、

「また会ったね」

そんなふうに言つてこの前と同じ笑顔を見せた。

僕は彼女とコーヒーカップに乗った。二回目だったこともあつて、僕はリラックスして彼女と話をした。好きなドラマとか、ハマっているゲームとか、そんなたわいもない話だ。二人で話しているとき、彼女はよく笑つたし、僕もそれにつられてよく笑つた。コーヒーカップに乗り終わると彼女は、いろいろなアトラクションに僕を連れていった。相変わらず遊園地には人がいっぱいいたが、彼女は空いているアトラクションを見つけてるのが上手かった。それにしても、遊園地というのは不思議なところだ。年齢も性別も関係なくみんなが同じ顔をして楽しそうにしている。いつもは電車の中で怖い顔で新聞を読んでいるおじさんも、いつもはけだるそうに携帯をいじっている高校生もみんなだ。なんだか一人でそんなことを思っている僕は、遊園地の中の異端者のような気分になつてくる。

そんなことを彼女に話すと、彼女は笑いながらささやいた。

「楽しさというのは儂いものなのよ。夢は儂さの中にあるの」

彼女はたまにこんなテツガク的なことを言うのだった。

そして太陽が傾いてくると、彼女は観覧車へと僕を連れていった。観覧車のゴンドラは僕たち二人を乗せてゆつくりと上へのぼつていく。夕日で輝く海を見ながら彼女は言った。

「すごく珍しいことだけど、太陽が沈んでいく瞬間に緑の光が残ることがあるんだって。グリーンフラッシュとも言んだけど、それを見られたらしあわせになれるらしいよ。この観覧車の上からならいつか見られるような気がするよね」

僕は、その緑の光を彼女と二人で見られたらいいな、そんなことを思つて夕日の沈んでいく海を二人で眺めていた。

観覧車から降りると、彼女の姿はまた消えてしまった。

僕は休日ごとに彼女と遊園地での時間を過ごした。いつも同じ流れだ。いろいろなアトラクションを回って、夕方になると観覧車に乗って夕日を眺める。そして、その後彼女はどこかへいなくなつてしまう。もちろんその理由を聞いても彼女は教えてはくれないが。

ある時僕はずっと疑問に思つていたことを聞いた。どうして僕に話しかけたのかということだ。彼女は大きな目をぱちりとまばたかせてこちらを見た。

「それは決まっているじゃない。あなたが一人だったからよ。孤独は人を傷つけるの」

さも当たり前であるかのようにそう言ったが、やはり僕にはわからなかった。僕がわからなかったことを悟つたのか、彼女はまた笑つて綺麗な黒い髪を揺らした。

彼女と会つて話すようになってしばらくしてから、僕は以前ほど人と話すことに対して緊張することがなくなつていた。学校でも親しい友達が増えて、休み時間や放課後に一緒に遊ぶことも多くなつた。彼女にこの事を話すと、彼女は喜んでくれた。しかし、彼女の目はいつもよりもなんだかさびしそうに見えた。

休日にも友達と遊ぶようになり、また部活や試験勉強で遊園地に行けない休日が増えた。

僕は謝りながら彼女にそれを伝えたが、彼女はそのことを僕にとつていいことだと言って、いつまでも私と遊んでいるようじゃだめだ、と僕を諭した。

僕はある日、遊園地に友だちを連れていくことになった。彼女のことをみんなに紹介したいと僕が言うと、彼女はそれを断った。

「大人数は苦手なの。大人数だと観覧車にも乗れないの」

理由になつていいのかよく分からなかったが、彼女が嫌がっていることはわかった。観覧車の中でのこの会話で、その日の彼女との会話は終わった。

「さようなら」

彼女は観覧車が一周する少し前に小声でそうつぶやいた。彼女はいつも気づくといわなくなつてしまい、別れの挨拶なんてしたことなかったのに。

そして、それが彼女との最後の会話だった。それ以降何度遊園地へ行つても彼女と会うことはできなかったのだ。

友だちを遊園地へ連れて行く日がやってきた。一緒に行く二人の同級生はこの日を楽しみにしてくれていたが、僕はなんとなく心が晴れなかった。もちろんなぜか会えなくなつてしまった彼女のことが気がかりだったからだ。

僕は二人を案内した。アトラクションに乗る順番は僕がほとんど決めた。彼女が僕にそうしてくれたように。彼女をずっと見ていたおかげだろうか、僕は遊園地を闊歩することができるようになつていたし、空いているアトラクションを手際よく探すことができた。遊んでいる途中で、視界に綺麗なショットカットがうつり、もしかしたら彼女かもしれないと思つて目で追つたが、まったく別の女の子だった。

日も暮れてきた。僕は最後に乗るアトラクションとして、観覧車をとつておいた。三人分のチケットを手に、観覧車に乗りこむ。彼らは今日一日に満足してくれたようで、楽しみに話している様子を見ると僕も嬉しかった。それと同時に、不意にもう彼女には会えないのだろう、一緒に観覧車に乗ることもないのだろう、そんなふうにした。でも、僕の最初の「友だち」である彼女のおかげで、僕には彼らのように気楽に話ができ、休日を過ごすことができる友だちができたのだ。

「孤独は人を傷つけるの」

僕は彼女の言葉の意味がわかった気がした。そして、僕が孤独ではなくなったことも。

観覧車はゆっくりと回り、僕たちを乗せたゴンドラは上へ上へのぼつていく。まぶしい海に、友だちが歓声を上げる。見慣れた景色は、僕にもいつにも増して輝いて見えた。二人が今度は都会のビル群に興奮している間に、僕は彼女のことを考えながら海を眺めていた。ちょうど夕日が海へと吸い込まれていく。

沈んでいく太陽は、緑の光を放っていた。

(終)